



utsunomiya **Blitzen** **TIMES**

December.2025

Vol.98

Race Report

12.7・8 宇都宮シクロクロス Day-1/Day-2
12.15 シクロクロス全日本選手権

宇都宮シクロクロス2連戦 沢田が4位&2位

地元・ろまんちっく村で開催された宇都宮シクロクロス2連戦。全日本選手権直前の重要なレースで、Day-1はサポーターの声援を受けながらも表彰台を逃す4位に終わった沢田時だったが、翌Day-2では積極的な走りで2位表彰台を獲得。

ホームコースとなる「道の駅うつのみやろまんちっく村特設コース」で行われた宇都宮シクロクロス。12月6日(土)・7日(日)の2日間にわたりJFJ/CXシリーズ第8・9戦(ともにUCI Class2)が開催され、多くのサポーターとジュニアチーム・ブリッツェン☆ステラの声援を受けながらレースは行われた。全日本選手権の前週にあたることもあり、コンディション確認と実戦の中での「勝ち方」を探る重要な2連戦となった。

Day-1、沢田がエリート男子に出場。2・5キロの周回コースを10回フィニッシュまでの0・7キロで争う25・7キロのレースに臨んだ。コースは泥区間を多く含むレイアウトながら、この日は比較的ドライコンディションとなり、ハイスピードな展開が予想されるコンディションだった。

1周目から沢田、織田聖(弱虫ペダルサイクリングチーム)、副島達海(TK Works)の3名による優勝候補バックが形成される。しかし2周目以降は織田選手が主導権を握るハイペースとなり、副島選手がこれに食らいつく一方で、沢田はやや遅れて単独3番手での追走を強いられる展開になった。

6周目には4番手の成田光志(OLIVE)が沢田に合流し、ここからは3位表彰台を懸けた激しいマッチレースへと様相を変えた。



最終周回10周目、先頭では織田が成田を振り切つて優勝を飾る。背後では沢田と成田が同バックで最後のスプリント勝負に突入するが、僅差の争いの末に沢田はかわされて4位フィニッシュ。表彰台を逃す悔しい結果となった。レース後、沢田は「調子は良かったがペースが速く、ちぎれてからが苦しかった」と振り返りつつ、「しっかりと追い込めたので、翌日に向けて立て直したい」と前を向いた。



スタート直後のポジション争いはD級以上には激しさを増した。沢田は落ち着いて最初のコーナーをクリアし、前方で展開。岡は後方グリッドから少しずつポジションを上げていく。シクロクロス特有の短時間決戦の中、とにかく前で勝負することが求められる状況だった。

レース序盤から沢田、織田、副島、松本一成(MVOLA)による先頭バックが形成され、沢田と副島が主にペースを作る。3・4周目も構図は大きく変わらず。大きく動いたのは5周目。ここで織田が鋭いアタックを仕掛けると、沢田と松本が即座に反応。一方で副島はトラブルで後退、先頭争いは3人に絞られる。やがて織田のペースが上がると、沢田とのタイム差はじわじわと広がり、独走態勢が固まり始めた。沢田も後方から迫る松本を振り切るべくペースアップし、単独2位のポジションを死守していく。

最終10周目、織田は独走優勝。背後では2位争いが最終局面を迎えたが、沢田は最後まで集中力を切らさず、松本を突き放して2位でフィニッシュ。Day-1の悔しさを晴らす表彰台を手にした。岡は「やはり」となり完走扱いとはならなかったものの、71名出走の中で完走者15名というサバイバルレースを走り切った。

レース後、沢田は「昨日は応援に応えられず、今日はチャンスが来ると信じて徹底的に前で走った」と語り、優勝こそ逃したものの「できるベストのレースができた」と手応えを口にした。風邪の影響で万全ではない呼吸機能も徐々に戻りつつあり、「全日本は優勝しか狙っていない」と力強く宣言。泥コンディションを得意とする自らの特性を生かすべく、体を労わりながら決戦に備えると思気込んだ。

一夜明けたDay-2同じコースで行われるJFJ/CXシリーズ第9戦。沢田に加え、岡篤志も出場しAsemo宇都宮ブリッツェンから2名体制で挑むことになった。前日4位に終わった沢田にとっては、全日本前に流れを変えたい一戦であり、また岡にとってはゼッケン71番・後方スタートからどこまで前にポジションを上げられるかがテーマとなった。



ホーム開催の宇都宮シクロクロス2連戦は、Day-1・4位、Day-2・2位という結果以上に、沢田が攻めの姿勢を貫き、全日本選手権に向けて確かな手応えと課題を持ち帰る2日間となった。サポーターの声援を背に走った経験は、必ずやタイトル奪還への原動力となるはずだ。

全日本シクロクロス 沢田が3位表彰台

大阪府営二色の浜公園で開催された第31回全日本自転車競技選手権シクロクロス大会。マウンテンバイク、ロードレースと走り続けてきた長いシーズンの締めくくりとして挑んだ沢田時は、砂浜と強風が待ち受けるタフなコースで最後まで粘りの走りを披露し、3位表彰台を獲得した。

Digest movie



12月14日(日)、大阪府貝塚市の大阪府営二色の浜公園特設コースで第31回全日本自転車競技選手権シクロクロス大会が開催された。今シーズンの集大成ともいえる一戦に、Team宇都宮ブリッツェンからは沢田時が出場し、全日本チャンピオンジャージ獲得を目標にスタートラインに立った。

沢田は10月の東北シクロクロスでシクロクロスシーズンを開幕させ、その後に出場したタイでのグラベルレースでは優勝を飾るなど好調な序盤戦を送った。一方で、11月の関西C×C琵琶湖グランプリでは風邪の影響もあって5位と表彰台を逃し、苦しいレースも経験してきた。それでも先週の宇都宮シクロクロス2連戦では、Dゼン1の4位からDゼン2では2位表彰台と内容を向上させ、徐々にコンディションを取り戻して今大会を迎えた。

会場となった二色の浜公園は、アスファルト区間からオフロード、そして脚にダメージを与える砂浜区間や階段が組み合わされたテクニカルかつパワーも要求されるレイアウトだ。前夜に雨が降ったことで砂が締まり、例年とは違うコンディションとなったが、当日は強風が吹きつけるシクロクロスらしい過酷な状況となった。



レース前、金曜日から試走を重ねてきた沢田は「体は一番動いている印象」と話し、「相手を見るよりも、自分の得意なセクションで主導権を握るレースをすれば優勝につながる」と力強くコメント。「せっかく大阪まで来たので、全日本チャンピオンジャージを持ち帰りたい」と、この日がシーズン最後のレースとなる決意も口にしていった。

0・6キロ×3・23キロ×8周＝26・44キロで争われるエリート男子がスタート。序盤はフラットな舗装路を駆け抜けた後にオフロードへと入り、砂浜や階段区間が選手たちの脚とテクニクを削っていく。特に砂浜では、乗車で突き進む選手、バイクを押す選手、担いで駆け抜ける選手など、選手ごとの特性と戦略がくつきりと分かれるセクションとなった。



1周目の時点で先頭バックを形成したのは、沢田、織田聖(弱虫ペダルサイクリングチーム)、副島達海(TFK Works)、横山航太(ペダル)、松本一成選手(WVOTA)の5名だった。

3周目、4周目と周回を重ねるごとに、トップの織田と3番手の沢田のタイム差はじわじわと拡大し、30秒前後の開きが生まれる。5周目に入っても構図は変わらず、織田が独走体制を強める一方で、副島が2番手、沢田が3番手の隊列が続くが、ここで沢田が諦めずに粘りの走りを見せる。

6周目、沢田は前を行く副島を追い続け、砂浜区間やテクニカルなセクションでじわじわとタイム差を削っていく。ついに両者は同一グループに復帰し、2位争いが本格的なマッチレースの様相を呈してきた。

7周目には沢田が前に出てリードする場面もあり、ゴール前のスプリント勝負を見据えた駆け引きが繰り広げられる。

迎えた最終8周目、トップの織田選手は危ない走りであり、そのまま先頭でフィニッシュして全日本タイトルを獲得する。背後の2位争いは一進一退の攻防が続く、一時は沢田が前に出る場面もあったが、副島選手もこれに食らいつき、フィニッシュラインまで緊迫したデッドヒートが続いた。

最後はスプリント勝負となり、副島がわずかに先着して2位を確保。沢田は1秒差の3位でフィニッシュし、2年連続となる全日本選手権シクロクロス3位表彰台を獲得した。優勝には届かなかったものの、シーズンを通じて積み重ねてきた走りや意地を示す結果となった。



レース後のコメントで沢田は、「昨年と同じメンバーで同じ順位。2周目から織田選手に離され、力の差を感じた」と率直に悔しさを語った。その一方で、「このタイトルを狙うなら来年はやり方を変えないといけない」と前向きな課題意識も口にし、「シクロクロスは楽しいし、応援も力になる。1年を通してのサポートに感謝したい」とシーズンを振り返った。

マウンテンバイク、ロードレース、そしてシクロクロスと、多忙なスケジュールの中で走り続けた2025年シーズン。練習やレースはもちろん、遠征や移動による目に見えない負担も大きい中で、それでも常に前向きに全力を尽くす姿勢が印象的だった。次戦は年明けの東北、そして東京でのシクロクロスが控えるが、まずはしっかりと心身を休め、再び力強い走りを見せてくれることに期待したい。



2026 シーズン 新体制情報

2025 年 12 月 11 日 (木) 栃木県庁記者クラブにて、Astemo 宇都宮ブリッツェン 2026 シーズン新体制発表会見を行いました。

2026 シーズンは、継続 10 名、新規加入 3 名の計 13 名体制で戦ってまいります。また今シーズンで引退した小野寺玲は、チーム PR アンバサダーに就任しました。

新規加入ライダー (3 名)

増田成幸、セルジオ・トゥ、宮崎泰史

継続ライダー (10 名)

谷順成 (キャプテン)、フォン・チュンカイ、沢田時岡篤志、武山晃輔、菅野蒼羅、阿藤来夢、秋元碧坂井洋、貝原涼太

チーム PR アンバサダー

小野寺玲

国内ツアーを幾度も制してきたブリッツェン。地域型プロロードレースチームとして積み重ねてきた歴史と誇りを胸に、2026 シーズンは、これまで描いてきた「夢」をさらに超えていくステージへ挑む。選手・スタッフ・地域・サポーター、そしてパートナー企業の思いが重なり、一人では届かない場所へ、チームとして突き進む一年にしていこう。

“夢のその先”にある未来を、仲間と共に切り拓いていくシーズンが始まる。

私たちは宇都宮ブリッツェンを応援しています。

Astemo



Thank you for your support.

Blitzen 3